遠江・山と里の民俗

会報　第007号

世襲の家々と地域が連携して守り伝えられている西浦の田楽

次世代に民俗芸能をツナグ
～民俗芸能の継承及び振興に関する条例～

浜松市市民部文化財課

平成二十八年三月二十四日、浜松市議会二月定例会本会議において、議会提案による「浜松市民俗芸能の継承及び振興に関する条例」が全会一致で可決され、四月一日から施行されています。

浜松市は、平成十七年七月の広域合併により、天竜川や浜名湖に代表される豊かな自然に育まれた多様な文化遺産を有する都市となりました。特に、中山間地域を中心に歴史的・文化的な価値が高い無形民俗文化財が数多く継承されており、本市の魅力の一つとなっています。

平成二十五年には、ひよんどり・おくない・農村歌舞伎・田楽・神楽など、市内の十九の保護団体により「浜松市無形民俗文化財保護団体連絡会」が組織され、全市的なネットワークを構築して、情報共有するなど連携が進められてきました。市内の各地域で伝えられている民俗芸能をはじめとする無形民俗文化財は、地域に暮らす皆さまが活力に満ちたコミュニティを形成し、将来にわたって豊かな市民生活を実現するための重要な財産「地域の宝」です。

しかしながら、全国的な少子高齢化の進行や中山間地域の過疎化など、社会情勢の変化による後継者不足の問題をはじめ、無形民俗文化財を取り巻く環境は年々厳しい状況となっており、その継承は地域にとって大きな課題となっています。

こうしたことから、市民・関係団体・市が互いに連携し、連綿と受け継いできた無形民俗文化財を守り、担い手となる人材の育成を推進するとともに、将来の世代に引き継ぐことが、心豊かで潤いのある市民生活や活力ある地域社会の実現に寄与するものと考え、この条例が制定されました。

民俗芸能の継承に関する自治体の条例制定は、全国的にみても珍しく、先進的な取り組みだといえます。その特色は、基本理念に「担い手となる人材の育成を推進するとともに、民俗芸能を将来の世代に引き継ぐよう努めなければならない」と掲げ、「市民、関係団体及び市がそれぞれの役割を担い、相互の協働及び連携」することで継承と振興を推進していくと謳っているところにあります。市民の皆さま一人ひとりが継承の取り組みの主役になりますので、まずは身近な無形民俗文化財の魅力を知り、その地域の歴史や文化を感じるところからはじめていただければ幸いです。

また、市といたしましては、無形民俗文化財の普及公開事業を実施するとともに、次世代を担う人材育成の取り組みを支援してまいります。平成二十九年一月二十二日には「静岡県民俗芸能フェスティバルイン浜松」を西区の雄踏文化センターで開催し、市内の民俗芸能の魅力を広く伝えると同時に、後継者育成活動の現状と課題をテーマにしたシンポジウム「次世代へツナグ・手をつなぐ浜松の民俗芸能～伝統の中に見える未来～」を行います。長年後継者育成活動に取組んできた浜松市無形民俗文化財保護団体連絡会の参加団体のほか、新たな担い手として注目される大学生にもパネリストとして参加していただき、その継承活動体験を報告いただく予定です。

条例制定後、初めての大規模な普及公開事業です。多くの皆さまにご来場いただき、本市の無形民俗文化財の魅力を体感していただければ嬉しく思います。

細江神社の祇園祭り

祇園祭りの様子

北川　天

細江神社祇園祭りは、神輿が浜名湖の支湖の引佐細江湖を渡るいわゆる水上渡御で有名な祭りです。祇園ばやしを奏でながら、神輿船を先頭にして、何隻かの屋台船が引佐細江湖を渡る姿は、細江の夏の風物詩となっています。

優雅に進む屋台船

細江神社は明治以前、牛頭天王社と呼ばれていました。この牛頭天王とは、夏の病気を抑えてくれる神様です。当社の祇園祭りは、この夏の病気を抑えるために牛頭天王の祭りとして行われてきました。この祭りがいつ頃から始まったかは分かりませんが、今から約二五〇年前の「牛頭天王御祭礼記」には、

「……数十年ぶりに神輿が村々を回るようになった」ことが記されています。したがって、少なくても三百年間は続けられてきた祭りです。このような伝統があり、そして神輿が水上を渡るという祇園祭りは全国的にも珍しく、貴重な祭りです。

○祇園祭りの日程

七月第三土曜日の午後は、赤池様の祭りです。細江神社の御神体が流れ着いたと伝えられている赤池という小さな池の横に神輿を移して、神事を行います。この時、屯倉水神社をまつる油田地区の女子小学生が、舞を奉納します。

次の日曜日は本祭りです。昼過ぎに神輿の行列が細江神社を出発します。様々な行列がありますが、氏子七地区が出す「出引き」と呼ばれる屋台は祇園ばやしを奏でてにぎやかなものです。一行は都田川に架かる落合橋を渡り、屯倉水神社の近くの井口河岸で神事をおこないます。その後、祇園祭りの一行はそれぞれ船に分乗します。

船の上では祇園ばやしが勇ましく

船渡御の一行は祇園ばやしを奏でながら都田川を下り、引佐細江湖を回ります。実に情緒あふれる船渡御です。そして船は対岸の五味半島に上陸します。その後、祇園祭りの一行は祇園ばやしにのせて、中区・下村・跡川・呉石の各集落を回り、夜八時ごろに細江神社に到着します。最後に細江神社境内では、太鼓の乱打と祇園ばやしの笛の音で、祭りは最高潮に達します。実に勇壮な祭りです。

○船渡御の意味

船が出発する前に、油田の屯倉水神社（以前は水神社のみ）の前で神事を行います。そこで水神社により「水」の力を付けた渡御船一行が水上を渡り、さらなる水の力を蓄えて村々を回ります。細江神社祇園祭りは、まさに水の力で夏の疫病を抑えようとした「水の祭り」だと言えます。したがって船渡御は、この祭りの最も大切な儀式です。

先に五味半島に着いたお神輿は屋台船を待つ

○祭りの価値

神輿船や出引き舟が湖内を盛大に渡る祇園祭りは、静岡県内では他に例を見ません。しかも祇園祭りの本来の意味である「水の祭り」を視覚的に表している祭りとして貴重なものです。そもそも京都の祇園祭りも、水の力が大きな要素を占めています。

○祭りの問題点

■舟の調達

船の調達は難しく、特に出引き船用の一四隻の船（一つの出引き船に二隻を使用）の調達は困難です。そこで数年前から、交代で三地区のみが船を出しています。

■都田川の泥の堆積

河口は泥の堆積がひどくて、船の運航に危険性があります。早急にしゅんせつが必要だと思われます。

■参加者の減少

祭りは総勢三〇〇人の参加が必要です。しかし最近は参加者が少なくなっています。特にその中でも出引き船の青年や子供の参加者が、減少しています。早急に祭りの意義を地元の人に知らせ、祭りを保存する努力が必要だと思われます。

有玉神社　流鏑馬神事

高木　伸三

■由来

一六一五年大坂夏の陣に出陣した徳川家康が念願の勝利を治め凱旋の中、自分が乗っていた馬を八幡宮（現有玉神社）に寄贈しました。家康の思いを村人たちは心から受け入れ勝利を祝し、八幡宮の例大祭の時、馬を駆けることで喜びを爆発させました。馬上で矢を射る流鏑馬とは違い、有玉の流鏑馬は馬上で手綱を離し、弓を頭上で廻し、その美しさを競ってきました。

米津の浜で潔斎祈願の儀式

四〇〇年に亘る神事を今に伝えています。

○潔斎の儀

大祭前日早朝、流鏑馬行事に参加する一ノ松、二の松、三の松（騎乗する若者、流鏑馬衆という）は米津の浜にて潔斎祈願の儀式を行う。笹竹で斎場をつくり、お供えをし、祭詞の奏上、玉串拝礼を行い、流鏑馬行事の安全を祈願している。年番総代も参加し、清らかな砂を持ち帰り、奉納相撲場のお浄めに使用している。

○例大祭神事

例大祭の神事に流鏑馬衆は最前列にて参加し、宮司玉串拝礼の次のイの一番に玉串拝礼が行われる。

○お馬受け取の儀

三人の流鏑馬衆は、拝殿前で馬を受取り、幟旗を廻り境内北口から外に出ていく。

幟旗を八の字に廻るというこだわりもある。

○宮廻りの儀

流鏑馬衆は露払いを先頭に騎乗し、神社周囲をゆっくりと廻り、氏神様をお守り申しあげる。

○弓張りの儀

宮廻りを終え、一の松から順に鳥居をくぐり、弓を馬上で煌びやかに回す。その姿の美しさを神様に見ていただく。二の松、三の松も同じように馬上で弓を回しながら境内に入ってくる。群衆はその煌びやかな、ゆったりとした動きに感嘆する。

流鏑馬衆の宮廻りの儀

○射形の儀

拝殿の前に的を置き、一ノ松、二の松、三の松の順に矢を射る。近年、日本古来の弓道における小笠原流、日置流を元にした、固有の有玉神社流を考案し、上品で優美ながらも勇ましく、力強さを表現した立振舞が厳かさを表現されている。一人三回の射形が行われ、優美な姿と、的当てにより それぞれの荘厳さを競う。この時に用いた矢は、魔除けになるとの言い伝えにより見物人に分け与えている。

○剣の舞

三人の流鏑馬衆は昇殿し、真剣にて勝負を競うが、決着はつかない。

○奉納相撲

相撲にて勝負をつけることとし、一ノ松と三の松が相撲をとり、二の松が行司を務める。一ノ松が相撲に勝ち神事が終わる。

■今後の伝承

時代時代により神事は大きく変遷してきています。三〇年ほど前は、各地区から選ばれた流鏑馬衆は例大祭一週間前から、俗社会からはなれ、社務所に籠もり、質素な食事をしながら、井戸の水を何度もかぶり身を清めていました。米津の浜での潔斎も一日かけて行っていました。また、当神社の流鏑馬は馬上で矢を射て的に当てるものではなく、馬を疾走させる中、馬上にて手綱を弓に持ち替え、弓を回し、その美しさを競うものであるが、現在では、馬の疾走場が確保できず、境内にて馬を停め、弓を廻すことにしています。剣の舞は剣の保存など困難さがあり現在は行われず、奉納相撲も各地区から選ばれた小学生によって、相撲が行われ、流鏑馬衆は行司になって勝負を検分しています。

残された文書をもとに、今の時代にできることを行いながら、史実に忠実に継承したいとの声もある中、出来ることは改良しつつ、さらに、この伝統を受け継いでいくことができたらと考えています。

弓張りの儀

編集 浜松市無形民俗文化財保護団体連絡会・発行 浜松市 電話053-457-2466

勝坂神楽を大学生が伝承

いつかはこの獅子頭を被って！

浜松市中区布橋にある浜松学院大学の学生は、地域課題をテーマにした野外実習「長期学修プログラム」の一環で八月の一カ月間、天竜区春野町勝坂で生活しました。昼は農業に汗を流し、夜は週二回、「勝坂神楽」の練習に取り組みました。

八月に入って間もなく、本会の事務局はその様子を見せていただきました。登録文化財の旧勝坂小学校に隣接する「勝坂神楽伝承館」では、練習が始まっていました。

保存会のメンバーが演奏する太鼓や笛の音に合わせて、舞の練習に余念がありませんでした。子孫繁栄や五穀豊穣を祈念して舞う勝坂神楽は独特な所作が特徴のようです。何回も教わりながら練習に余念がありませんでした。女子学生は練習の様子を撮影して記録していました。

勝坂は過疎化が進み、人口は約二〇人。伝統ある神楽の継承が危ぶまれる中、門外不出の祭事を思い切って、開いた試みは、同様な悩みを抱える民俗芸能の伝承に活路を開くことになるのではないかと思って山を下りました。

戸惑いながらも一生懸命な姿に感動です

十月の祭には顔におしろいを塗り、派手な着物姿に女装した若者らしい軽やかな身のこなしで舞う神楽が展開されるのではないかと心高鳴ります。

浦川歌舞伎

九月二四日　佐久間ダムの放流で原田橋河川内仮設道路が通行止めとなっていましたが、年に一度の公演を待っていた大勢地元の方で賑わっていました。

二八回目となる演目は
- ○三人吉三廓初買
- ○伽羅先代萩　御殿（飯炊き）の場
- ○白浪五人男　稲瀬川勢揃いの場
- ○奥州安達原　袖萩祭文

白浪五人男を演じる小学生

この四幕を上演しました。

素人歌舞伎といっても、しぐさやセリフ言葉使いに、それぞれの表情が現れ、役者は役になり切り演じていました。会場内は地元の常連客や親族の人が集まり盛大な拍手を送っていました。

白浪五人男は地元の小学生が堂々と演目をこなし、おひねりが飛び交っていました。

磐田から来た人は原田橋が通行止めと途中で知り、迂回してここまで来ました。こんな素晴らしい上演が見れて感動ですと語ってくれました。

上演中に雨がひどくなり体育館の屋根に打ち付ける雨音がザワザワと拍手のように聞こえ盛り上がりに花を添えました。

昔この地で亡くなった江戸の歌舞伎役者・尾上栄三郎による歌舞伎の上演が発端となり、浦川の地に受け継がれている素人歌舞伎です。

昭和二十年代から途絶えていましたが歌舞伎を復活させようと、有志が集まり、平成元年に再興しました。役者から裏方まですべてを三十人程の浦川歌舞伎保存会の会員が行っています。現在、会員を募集中です。

■編集後記

夏は祇園まつりや盆行事が盛んに行なわれ、大念仏や念仏踊りが私たちの心を癒してくれました。

秋から冬にかけて、歌舞伎から花の舞が始まり正月のひよんどりとおくないと続き春には西浦田楽へと一連の祭りが続きます。

今年の三遠南信サミット以降、域内の民俗芸能を核にした日本遺産認定に向けた取り組みが進んでいます。そして浜松独自の地域遺産の推薦も受け付けています。これからも楽しみがたくさんあります。